

High Life Tea Time

作.. 木村 光寿

登場人物

- A 中学3年生
- B 社会人・28歳
- C 宅配・高校2年生
- D フリーター・23歳

喫茶店の店内。

下手が店内への入口。扉が開くとベルが鳴るようになっていいる。店内に入ると3つほどテーブルがあり、それぞれに付随する椅子が置かれている。壁面は薄汚れており、あちこちにチラシが張られている。下手側の壁に時計。上手にカウンターがあり、その周辺にも椅子。カウンタ上にPC、レジ等。カウンター奥には棚があり、コーヒー豆の入った瓶や本がならんでいる。さらに上手袖も扉になっており、キッチンや事務室につながっている。店内BGMがかすかに流れ続けている。

開場。

店内壁際の席にAが座って、コーヒーを飲みながら本を読んでいる。時折、時間を気にする様子。

5分後、Cが上手から扉を開けて登場。

C 「あ、どうも」

A 「ああ、おつかれっす」

C 「え、留守番？」

A 「そうそう」

C 「どこいった？伝票持ってきたのに」

A 「さあ」

C 「めんどくせー」

C、退場。

3分後、下手のドアが開き、Bが入ってくる。

B 「うん・・・うん・・・んー・・・」

B、おそろおそろ店内を見回す。携帯電話を取り出し、見比べなどしている。A、声をかける。

A「あの、」

B「あ、すいません、えっと」

A「えっと、お客さん」

B「いえ、違うんです、すいません」

A「あ、はい」

B「すいません、お邪魔しました」

A「え、いや、別に」

B「いえ、違うんです、本当に」

A「いやいや、その」

B「すいません、おじやました」

B、退場。A、仕方なく席に戻る。

2分後、Aがカウンターに入ってPCを操作し、店内BGMを変更する。

10分後、Bが再度下手から登場。入口の扉の前でたたずんでいる。

B「やつぱり、多分、でもなあ・・・」

A、その気配を感じて、外のほうを気にする。やがて、扉を開いて声をかける

A「あのー」

B「あ、はい」

A「あの、やつぱり、何か？」

B「え、いえ、違います、すいません」

A「いや別に」

B「いえほんと、すいません、失礼しました」

A「あ、はい」

5分後、開演。Dが下手より登場。

D「おっす」

A「おそくない？」

D 「え、そう？」

A 「これ、来るまでって約束だったんだけど」

D 「いいじゃんただでコーヒー飲めるし」

A 「別にそんな好きじゃないし。ていうかなんでシロップ置かないの？」

D 「さあ」

A 「砂糖すらないし」

D 「謎のこだわりじゃない？マスターの」

A 「いらねえ、それ」

D、カウンターに入りエプロンをかける。

D 「ていうか、何このBGM」

A 「え、変えた」

D 「センスないよ」

A 「いつものだと寝ちやうじゃん」

D 「いや店が目指してるのそっち系だから」

A 「寝る系？」

D 「ヒーリングとかいおうよ」

D、BGMを変更する。

D 「で、帰らんの？」

A 「もうちょっと。あとカフェオレ」

D 「牛乳原価高いんだけど」

A 「甘みないならせめて中和させて。ていうかバイトなんだしいいじゃん、原価とか気にしないで」

D 「一応でも、うちの店だし」

A 「え、そうなの」

D 「知らなかったんかい」

A 「え、だって呼ぶじゃん、マスターって、あれ」

D 「いや職場では呼ぶでしょ」

A 「そっか・・・え、でも嫌じゃない？身内のバイトって」

D 「いや、まあ、そうだけど。ともかく、あれはあれで一応親」

A 「そうなんだ・・・え、マスターやるな、あの歳なのに」

D 「なんで歳知ってたんだ」

A 「いや知らないけど、おじいちゃんじゃん明らか」

D 「まあ色々あるんだよ、そこは」

D、Aのカップをとり、カウンターに戻る

A 「え、そのまま注ぐのそれ」

D 「洗う手間めんどいじゃん」

A 「混ざるじゃん味」

D 「どうせ同じコーヒーだよ。てか何、受験勉強はどうした」

A 「してるじゃん、ほら」

D 「本読んただけでいけるの、高校って」

A 「多分。ていうか内申でもうだいたい決まってるし」

D 「え、何それ」

A 「なんていうの、成績とか、今までの。そういうのも点数だから、だいたい受かりそう
なところしか受けないから」

D 「え、じゃあもう合格確定してるわけ？」

A 「いや、そうでもないんだけど。多分。だいたい」

D 「なんだそりゃ。ふうん、なんか、つままないね」

A 「おばさんにはわからないよね」

D 「受験とか二度としたくないなあ。もう年号とか公式とか完璧忘れたわ」

D、カフェオレを出す。

D 「じゃあ、別に遊んでいいじゃん」

A 「いや、さすがにそれは。親に悪いでしょ」

D 「何その無駄な気遣い」

A 「いややめてほしいんだって実際。別にこっちは気にしてないのに、家族全員微妙に大
事にしてくれる感とか」

D 「ふうん」

A 「さっさと一人で暮らしたいなあ」

D 「へえ、そうなんだ・・・めんどくさいよ色々」

A 「え、したことあるの？」

D 「一瞬。就職した時に」

A 「ああ」

D 「最初は確かに開放感やばかったけどね」

A 「そりゃそうでしょ」

D 「でもなんかね、段々、あーそっか一人なんだーって思う時があつて。外から帰ってき

て散らかった部屋見たときとか」

A 「単にズボラなだけじゃん」

D 「いやそうだけど。なんていうかな、散らかった部屋みてもさ、自分ひとりのものしかないわけ。服とか、荷物とか」

A 「そりやそうだろうね」

D 「まあ最初の会社が割とやばかったから、ブラック具合。疲れて十一時くらいに帰ってくるでしょ。絶対明日も仕事山積みでしょ。それで扉開けたら、その光景がどーんなわけですよ」

A 「ふーん」

D 「しかも、それをなんか、下手したら一生つづけていくわけじゃん、死ぬまで」

A 「まあね。結婚できないだろうしね」

D 「うっさい・なんかさ、そう思ったら、すごい虚しくなって。家にいたら少なくともさ、散らかした服に文句言ってこられて勝手に洗濯とかされて。ご飯も全然食べたくないものばかり並んで外食もできないっていう。それって、当たり前じゃないんだなあって」

A 「うらやましい」

D 「まあ結局ないものねだりなんだろうけどさあ。実家にいたときはやっぱり、うっとおしいって思ってたし。でもなんか、そのうっとおしさが、実は割と必要なんだなあって、生活の中で」

A 「そうかあ？」

D 「そうなんだな。まあだから、今はこうして、離れて住みつつ仕事手伝ったりしてて、割と良い距離感なわけですよ」

A 「ようは、一人だと寂しいなってだけのことでしょ。うちはある程度いわー、一生一人でいたいくらい」

D 「やったことないくせに」

A 「いやでも今とか、そうだって。一日部屋にいて家族と顔合わせないもん、ほぼ」

D 「まあ、いまのうちに言ってる」

A 「絶対そうだって」

C、下手から登場。

C 「どうも」

D 「あ、お疲れさま。ていうか一応もう開店してるんですけど」

C 「どうせだれもこの時間いないじゃないですか。てか裏のインターホン押したけど無音だったし」

D 「あーまた壊れたか」

C「ジュース2ケース置いたから、これ、受け取り伝票お願いします」

D、伝票に記入している。

C、カウンターから客席に出てきてAの前に座り

C「どう、頑張ってますか受験生」

A「別に、ていうかそちはそんな暇でいいの」

C「高校生は春休みまっさかりなんでえ、手伝いで絶賛バイト中ですう」

D「え、何、居座る気？」

C「ここので午前中の配達終わったんで、ちょっと休憩で。ジュースください、自分持ってきた奴」

D「まだ古いのあるから」

D、上手に退場。

C「ねえ、何の勉強やってんの」

A「世界史」

C「うわ、つまんね」

A「別に勉強だし。つまるとかじゃないし」

C「真面目か。1000年前の人間が何したか知って意味あるの？」

A「あ、それ知ってる」

C「何が」

A「そうやって色々理屈言っついてやらないやつは口だけで将来ろくなやつにならない。パターンだって」

C「何それ」

A「学校で言ってた」

C「うわ、なんか、終わってるなそれ」

A「でも事実でしょ」

C「可愛くねえ」

D「（上手から登場しながら）こら喧嘩すんな」

C「いや別に。違いますよ、ちょっと勉強みてただけで」

A「どこが」

D「自分は勉強しなくていいの？」

C「あ、全然。大丈夫大丈夫」

A「そんな優秀だっけ」

- C 「うっさいな」
- D 「でもさ、ほんと、高校生なんか一番勉強難しくなるわけでしょ実質。いいのこんなで」
- C 「いや、んー・・・まあ、したところでっていうか、結局卒業後決まってるんで」
- D 「低すぎたら駄目でしょ、落ちるよ」
- A 「まさかの留年？」
- C 「するか。さすがにそんな、それくらいはやりますよ、そこそこ。でも逆に、別にそんな滅茶苦茶頑張ったところで、うちの場合は進路決まってるしなあっていう」
- D 「あ、もう家継ぐってきまり？」
- C 「まあ、多分。一応親も好きにしろとかいいつつ、そうして欲しいっぽいし」
- A 「じゃあ配達員なるんだ」
- C 「酒屋ってそれ以外も色々やるの。これだから子供は」
- A 「悪かったね」
- C 「あのな、言つといてやるけど、そんな勉強とか今後の人生でまず使うときないからね」
- D 「そうとも言い切れんけどね」
- C 「いやでも、他にもっと大事なことがありますって絶対」
- D 「たとえば？」
- C 「んー、何だろ、えーとね」
- A 「ないんじゃない」
- C 「うっさいな、あるって」
- D 「まあ、わからなくもないけどね」
- C 「ほら、あれ、コミュニケーションとか？」
- A 「絶対適当に言った」
- C 「違うからね」
- D 「いや一応大事なことはあるけどさ」
- C 「でしょ」
- A 「あるのコミュ力」
- C 「あるよ、なめんな配達員。店先周りでどれだけ話すか」
- A 「そういうのじゃないと思うんだけど」
- C 「似たようなもんだよ」
- A 「でもそれ絶対成績関係ないし」
- C 「やっぱ、今の学校教育は歪んでるね」
- D 「えらそうに」
- C 「いやでも知ってます？学年成績上位の奴が、バイト二日でばっくれたの」
- D 「なにそれ」
- C 「いやなんか知らないけど。接客、レジで。お釣り間違えて怒鳴られて、それで辞めた

って」

A 「なんだそりや」

C 「下の学年の話だけどさ、もうずっと噂されちゃってるからね」

D 「とりあえずばっくれはやめて欲しいな、店まわらなくなるから」

C 「まあ、一応やめるとは言ったらしいけど」

D 「じゃあばっくれじゃないじゃん」

A 「話盛った」

C 「でもそれも親連れてだよ」

D 「うわ、まじか」

A 「あー」

C 「やばいでしょ」

D 「まあ、よっぽどしんどかったんじゃないの」

C 「さあ」

A 「・・なんだろ、なんか、笑えないっていうか。気持ちはわからなくはないかな」

C 「うそ、まじで？」

A 「それだけまじめっていうか、思いつめちゃったのかなあ、的。世の中不公平だね、こんな適当なバイトもいるのに」

D 「別に、いいじゃん、それくらいいいんだって。そんな、追い詰められるより」

C 「ほんとほんと」

A 「そうですかー・・・なんか働くのってあれだね。大変ばいね色々」

C 「でしょ？」

D 「いや、お前は言うなよ」

C 「そっちこそ。だいたい、なんのために働くのかって名言あるじゃないすか。生きるために働くんで、働くために生きるんじゃないって」

A 「この流れで言うとお台無しだなそれ」

C 「いやいや。じゃああれか？ブラックで過労死か？客に怒鳴られて精神病むか？絶対いやでしょ」

A 「そりやまあね」

D 「まあ、真面目なだけで上手いことやってけるとは限らないね、世の中」

C 「でしょ、だからまあ、やっぱリコミュニケーションなわけですよ最後は」

A 「なーんか、それはそれで難しいのかなあ」

D 「まあ、向いてるタイプっぽくはないね」

C 「深く考えなくていいんだって。適当に話し合わせてしゃべっとけばいいんだから」

A 「そうはいかないでしょ」

C 「それが案外いつちゃうんだなあ。だいたいそんな、会話なんて深く考えてないからね、ノリだよノリ」

A 「ノリって」

C 「その場が明るくできればとりあえずいいわけだからさ、とりあえず。大事なのは笑顔とキャラクターですよ、ねえ？」

D 「まあ、接客するならそれ相応の対応ってのはあるね」

A 「え、なんかそれ、上手に嘘つけてこと？」

D 「嘘とかではないけど。営業スマイルってのはあるでしょ、当然」

D、自分の飲み物を入れるため上手に退場。

A 「いやわからなくはないけどさあ。なんだろう、やっぱそれは無理だわ」

C 「できないと苦しむぞ、絶対。バイトの面接だってそうだろう」

A 「でもさあ。なんか、思い切り大人の汚いところっていうか。そんな、嘘ついてまで自分大きく見せようとか、なんかすごくダサイなあって」

C 「えらそうに」

A 「あーあ」

すこし間

C 「何落ち込んでんの」

A 「別に落ち込んでないよ」

C 「しなくていいの、勉強」

A 「なんか、したところでなあ。結局そうやってごまかしながら生きてくほうが重要なわけでしょ」

C 「極端だな」

A 「そういつてたじゃん」

C 「まあそうだけど。そんな落ち込むなって」

A 「落ち込んでないし別に。ただ、そうやって嘘ついてごまかすみたいな生き方する必要というか、これから社会に出たらそんなことしなくちゃいけないのかなあって、うんざりしただけだよ」

C 「まだまだ子供には難しいお話だね」

A 「これ学校で大人が言ってたんだけど。だから自分に正直に生きろって」

C 「ご立派ですなあ」

D、上手から飲み物を持ち登場。

D 「まあ大人だってね、人間だから。完璧じゃないからさ」

- C 「夢見る子供相手に言っちゃいますかそれ」
D 「誰が」
C 「え、だって一応自分も大人じゃないですか」
D 「も含めてさ。別に、そりゃ昔より歳はとったけどだから何って感じだし」
A 「なんだっけ、なんか漫画であつたな、それ、ドラえもんか」
C 「何それ？」
A 「え、ドラえもん知らない？」
C 「いやじゃなくて。何で出てくるんだよそれが」
A 「いやなんか、そんな台詞があるんだって。漫画の中で」
D 「へー」
C 「え、ドラえもんが言うの？大人だって人間とか。ロボットのくせに」
A 「いや、ちょっと違うけど。なんだっけ、結局親だって人間だもんとか言うの。親子で喧嘩するんだけど、結局親も人間だし、完璧じゃないから許そうぜ、みたいな」
C 「変なの。ヒミツ道具関係ないじゃん」
A 「いやこれ相当はしよってるから、道具は道具であるけど。なんかわけわからん話で、妙に覚えてるの」
C 「ふーん」
D 「まあでも、親も人間かもしれないけど、完璧じゃなくても最低限やってほしいことってのはあるんだけどね、こっちからすれば」
C 「あるある」
A 「え、とりあえずほっといてくれたらそれでいいけどな」
D 「それで店までほつたらかして、娘に仕事させたり子どもに店番させたりするつてのもいいわけ？」
A 「いや、それはさすがに異常だけどさ、確かに」
C 「案外楽しんでるくせに」
A 「別に、ないからね、ほんと」
D 「もう昔からそうだけどさあ、いまさら」
A 「よく嫌にならないとは思うね」
D 「嫌になったから母親はでてったんでしょ、多分」
C 「え、そうなんすか」
D 「よく知らんけど。もうはるか昔のことだから」
A 「そうなんだ」
D 「そうなんですよ、一応。なんだろうな、そりゃこんな店やるのが夢でそれは借金してさんざん苦労したのかもしれないけどさあ」
A 「ああ、前言ってたそれ、酔っぱらってたとき」
D 「こっちはそれ100回以上聞かされてるから」

C 「まじっすか」

D 「気持ちにはわからなくてもないけど、でもだからって振り回される家族とかは、ひたすら迷惑でしかないでしょっていう。おかげでもう、顔とか完璧忘れましたよ、母親とか姉とか」

C 「すごいっすね、なんか」

A 「うわー・・・なんか、自分だったら我慢できないかも。なんでそれ、まだつきあってんの？」

D 「なんか、あきらめというか、もういつかの。逆に反抗期なかったしね、呆れて」

A 「はー」

C 「そういや、いい加減そのマスターこないんすかね？」

D 「あ、どうだろ、また寝てるかも二階で」

A 「え、まじで」

D 「昨日もだいぶ酔っぱらって騒いでたし、上で」

A 「あー」

D 「また、売りもんの酒飲んで」

C 「一応、毎度ありなんすかね」

D 「ほんといつまでもクズだね、あれは」

A 「そうだね」

C 「一応次の仕入れとかきいとかなくていいんすかね？」

D 「わかってるって、どうしようかな」

A 「こっちもいい加減もう帰ろっかな」

C 「勉強あきらめたか」

A 「こんなところより図書館でもいくほうがよっぽど集中できるから。邪魔する高校生とかいないし」

C 「はいはい」

D 「ね、それ行くついでに呼んできてくれない」

A 「は、なんで」

D 「いや、なんか、めんどくさいじゃん酔っぱらい起こすの」

A 「いやそんなこと中学生に頼まないでよ、すぐ上でしょ」

D 「ちえー・・・やっぱりまた介護にいくか、おじいちゃんの」

C 「頑張ってください」

A 「戻ってきたら帰るからね」

D 「わかったわかった」

D 上手から退場

- A 「大変だね、なんか」
C 「まあ、だろうね」
A 「でもやっぱ、うっとおしいな家族って」
C 「そうかな」
A 「そうだよ」
C 「まあ、そういう色々めんどくさいことに耐えていくのが世の中ってもんなわけですよ」
A 「偉そうに言ってるけどさ。そっちは、どうなの」
C 「なにが？」
A 「いや、本業は。高校生活でしょ」
C 「そうですね一応」
A 「さっき言われてたじゃん。全然、こんな、バイトばかりでいいの」
C 「悪かったな、不良高校生で。いいんだよ別に」
A 「高校って、留年あるんでしょ、中学と違って」
C 「だからさすがにそこまで酷くないって」
A 「ほんとに？」
C 「よっぽどじゃないとないから、そんな、留年とか」
A 「よっぽどぼいじゃん」
C 「うっさいわ。人のことより、自分の心配してろよ、高校入れるのかどうか」
A 「いやほら、高校生活って、どうなのかなあって。入ったところで。やっぱり違うのかな、中学と」
C 「そりやまあ、色々」
A 「たとえば？」
C 「たとえばっていわれても難しいけどな、んーなんだろう」
A 「自由だったりする？中学より」
C 「そりやそういうところもあるけど。まあ、学校にもよるけど。でも色々うるさく言われることだってあるよ」
A 「ふーん。皆やっぱ、大人じゃないの？」
C 「そう見える？」
A 「・・・ないかあ」
C 「うっさいな。あ、ジュースもう一本ちょうだい」
A 「300円になります」
C 「出世払いでよろしく」
A 「なんだそりや。酒屋の出世ってどうなんの（と、ジュースを取りに上手へ退場）」
C 「知らない（と、携帯を取り出し、操作する）」
A 「（ジュースを持って上手より戻りつつ）あ、スマホ。やっぱり皆持ってるのかな高校じゃ」

C 「んー、まあ、ほぼほぼね。まだ持っていないのか」
A 「親が高校はいるまでは駄目って。うっとおしい」
C 「まだいらないでしょ中学生」
A 「いや、クラスの子だいたい持ってるからね、半分以上」
C 「まじか、中学生のくせに生意気な」
A 「あんま変わらないくせに。まああと1か月くらいの我慢なんだけど」
C 「でもそういうや、最近は小学生が持ってるらしいからなあ」
A 「あれはさすがにやばいと思うけどね。あ、そういえば、スマホってなんか、店の情報見れるの？」
C 「え、何」
A 「いやなんか、さっき来てた人が見てたから」
C 「はあ？」
A 「いや、店に来た人が、スマホ見ながらなんか、見まわしてて。なんだろうって」
C 「いやそりや来るでしょお客さん」
A 「いや、なんか、そんなんじゃないかって」
C 「はあ？」
A 「なんか、さっきね。女の人なんだけど、ドアの前うろついてて。入ってきたけど、なんか声かけたら出ていった」
C 「何それ」
A 「わかんないって。しかも、2回も来たし。スマホ見ながら」
C 「え、なんか、怖くない」
A 「え、何、どういうこと」
C 「いや、わけわからんじゃない、それ」
A 「そりやそうだけど」
C 「やっぱ、泥棒かな」
A 「え、だって女の人ひとりだよ？」
C 「別にそれだって泥棒はできるだろ」
A 「そりやそうだけど、とるもんとかあるの、ここ？」
C 「一応店だから、売り上げとか？パソコンとか、あるんじゃないのほら」
A 「えー・・・」
C 「だいたい、こんな昼間誰も来ないような住宅街の喫茶店とか、目立ちにくいから多分。狙いやすいんじゃないの泥棒は」
A 「まじか、狙われちゃってる？」
C 「ひよっとするかもね」
A 「え、まじか、どうしよう」
C 「どうしようって」

A 「警察言おうかな、でも何て？」
C 「まだ無理だろ、何も取られてないし」
A 「あ、そうか、え、でもじゃあどうしょ」
C 「とりあえず気を付けとくしかないんじゃないの」
A 「この店絶対防犯グッズとかないよね」
C 「ないだろー」
A 「買っとけていつとくか、なんか」
C 「カラーボールとか？」
A 「え、何それ」
C 「なんかぶつけて色つけるボールのやつ、知らない？」
A 「知らない」
C 「世間知らずだな」
A 「そんな悪いことかしないからね」
C 「ほんとかよ。っていうか使う？これ（と、ポケットからドアアラームを取り出す）」
A 「え、なにこれ」
C 「なんか、たまたまだけど、さっき買ってこいって配達の前に言われてたの。なんか、泥棒来たら音が鳴るやつ」
A 「え、まじで、すごいじゃん」
C 「ちよっとテストしときたいし」
A 「え、どうやるのこれ」
C 「説明書あるでしょ、なんかドアにつけるだけっぽいけど」
A 「まじか、すごいな。でもそんな音だけでいけるのかな？」
C 「たいていの泥棒は音鳴ったら逃げるらしいよ、ネットで見た」
A 「へーそうなんだ」
A とC、下手ドアにアラームを取り付ける。
A 「（椅子に乗りながら）ここくらい？」
C 「なんか、合わさってないとだめだつて。あー、いいんじゃない？」
A 「OK、完璧」
C 「あとで料金請求しとこうかな」
A 「いいんじゃない？必要でしょ」
C 「これであとは、泥棒が来るのを待つだけ」
A 「まあ、そう都合よくは来ないだろうけど。鳴ったらその時が泥棒の最後だね」
C 「そういうことだね」

D、下手より登場。警報アラームが鳴り響く。慌てるDと止めようとするA、それを見て笑うC

D「何これ何これ、はあ？」

C「え、まじで？このタイミング」

D「いやなんだよこれ、お前ら」

A「え、ごめん、え、なんで」

C「いやさすがっすわ、狙ってるでしょタイミング」

D「うっさい、これ、ちよっと何まじで？」

A「いやだから、泥棒よけ」

D「はあ？」

A「泥棒よけだって」

D「意味わかんないから」

C「いや泥棒でしもう確実に」

D「もうとにかく止めてよ音」

A「え、これどうやんの」

C「知らないって」

A「なんで知らないんだよ」

C「見てないもんそんなの、説明書」

Cが扉を開めると、音が鳴りやむ。すこし間

C「びっくりしたねえ」

D「いや、お前がいうなよ。何ちよっと、まじで」

A「だからなんか、怪しいやつ来てたから、防犯グッズ」

D「はあ？」

A「なんか、泥棒来たら鳴るアラームだって」

C「あ、多分1000円くらいなんで、後でください」

D「いやいや、アホか。何勝手にそんなのしてるの、わけわかんないし」

A「でも泥棒くるかもしれないからって」

D「その前にお客さん来るでしょ」

A「いやそうだけど、え、だって泥棒来たら鳴るっていったじゃん」

C「誰だってドア開けたら鳴るだろそりゃ」

A「え、泥棒来たら見分けてくれるんじゃないの？」

C「どこの未来の発明だよそれは」

A「だからすごいって言ったのに」

C 「無理だろそんなの普通に考えて」

D 「もういいから。騒ぐな。なんかもう、なんだろう、無駄に疲れた」

C 「おつかれっす」

D 「お前のせいだから」

A 「ていうかなんで、二階行ってこっちから戻ってくるの」

D 「一応外まで見に行ったから」

A 「はあ？」

D 「無人だったんだって、二階の部屋。あいつ、またどっかうろついているのかなと思って」

A 「マスター？」

D 「うん」

C 「えーまじっすか」

D 「あいつ、もう完全やる気ないな。こっちにまかせっきりかい」

A 「え、どうすんの？」

D 「まあ別にいいけど。今日もう一日いるよ。なんか腹減ったから食べよ」

A 「え、勝手に？」

C 「怒られません？」

D 「もう頭来たから。この店今日から自分のもんだから。デイスイズマイショップ」

A 「え、じゃあこっちもちようだい」

D 「留守番のバイト契約は飲み物だけだろ」

A 「えー」

C の携帯に着信が入り、応答する

C 「あ、はい、お疲れ様。え、いや、まだもうちょいかな、一応。．．．え、なに、うそ。

まじでー？え、どうすんの。えー．．．え、もうそれ、後でそっちが行ってよ．．．

ああ、まあ．．．うん、そうね、うん．．．うん、いいよ、わかった。しゃべってる時

間が無駄だし。戻る、うん。準備してて、じゃあ。はーい」

A 「お仕事再開？」

C 「ていうかだるい。なんか、もう一度取りに行く」

D 「（ケーキを持って上手から登場しながら）え、何、どうしたの？」

C 「なんか今日、もう一つ注文入ってたんだって、ここ。倉庫にあったままにしてたから、取りにもどるの」

A 「ふーん」

D 「え、伝票になかったよ？そんなの」

C 「なんか別枠だって。特別の取り寄せだから」

D 「何それ、また謎のやつ注文したのかあいつ」

C 「おかげで再配達ですわ」

D 「どうせ近所じゃん」

A 「それが仕事でしょ」

C 「一応仕事は高校生なんだよ」

C、下手に退場しようとする

D 「ちよい待ち。もう開店してるから一応。裏から行って」

C 「細かいなあ、遠回りじゃん」

D 「一応業者でしょうが。店と上手いことやってくの得意なんですよ」

C 「はい」

C、上手に退場。すこし間

A 「高校生かあ」

D 「いや、あれが標準だと思わなくていいと思うけど」

A 「いや、そうとは思わないけど」

D 「そりゃ良かった」

D、ジュースを片づける。A、ケーキを食べる

D 「あ、こら、泥棒」

A 「さっき泥棒アラーム鳴らしたくせに」

D 「うっさい、反省してないだろ」

A 「してますよ、ほんとに狙われてるって心配したんだから」

D 「嘘つけ、もう。(ケーキを食べながら) で、帰らないの？もういいよ」

A 「んー、もうちょっと」

D 「だらけてるなあ。まあやっても意味ないならしやうがないけどさ」

A 「んー、いや、ほんとにはさ、学校、選べるんだ、一応」

D 「あれ、そうなの」

A 「選べるっていうか。2つか3つなんだけど。危険な奴とそうじゃないやつと、その間
くらいのあって。そのどれか」

D 「ああ、で、一番安心な奴いくんだ」

A 「だって、そう言われてるし」

D 「親が？学校が？」

A 「両方」

D 「そりやまあ、落ちたら怖いからねえ」
A 「わかってるよそんなの」
D 「まあ、仕方ないんじゃない。親からしたら、やっぱり、心配だろうから」
A 「それが嫌なんだけどなあ。ほっといてくれないかな」
D 「反抗期だね」
A 「それともちよつと違うと思うんだけど。でも、誰でもあるんでしょ反抗期って」
D 「だから、うちはそんなのする余裕なかったって」
A 「ああ、そりやまあ、ちよつと特殊だけど」
D 「ほとんど毎日、朝から晩まで店に出続けて、帰ってきたら酒飲んで騒いで寝るだけだからね。反抗してる暇もないっていう」
A 「ああ。え、探しにはいなくていいの？」
D 「いいよもう。どうせ適当に帰ってくるし。帰ってこなきゃそれはそれでいいし」
A 「うわひど。でもまあ、しょうがないか、それだけやってきたら」
D 「いやまあ、別に店のことはいいんだよ。いいっていうか、ある意味それは仕事熱心なんだろうしさ。仕事っていうか、自分のやりたいことっていうか。そこは認める」
A 「え、そうなんだ。いいんだそれで」
D 「なんだろうな、自分が実際仕事してみて、全然やる気ないっていうか働くの向いてないって思ってたからかな。それなしでずっと打ち込んでられるのはある種尊敬する。愛すべき馬鹿みたいな」
A 「ふーん。ほめてんのかなそれ」
D 「一応そのはず。だからまあ、あとはとりあえず周りに迷惑さえかけなけりやねえ」
A 「徘徊したりとか」
D 「別にそんなのいいよ、こつちももうほつとくし。でもさ、やっぱり離婚はいかんだろ、色々」
A 「よっぽどしんどかったんだろうね、あれと付き合うの」
D 「いや、そりやわかんなくもないけどさ。でもそれ織り込み済みで結婚したはずだろお互いに」
A 「あ、そうなんだ」
D 「うん。一応、確か、そのはずだし。恋愛結婚とか言ってたから」
A 「なんかそう聞くとちよつとかつこいいのかな」
D 「実物は今やあれだけどね。本来は、二人で力合わせてこの店やるはずだったんだろう、おそらく」
A 「実際は我慢しきれませんでしたと」
D 「そういうことなんだろうなあ。もうね、なんで離婚とかするんだろ。いや限界になったからか。そりやそうだけど、でも一応もう子供二人いたわけでしょう、その時には」
A 「そうらしいね」

D 「そこらへん、もうちょっと責任感ほしいよな。お互いに。こっちは何もしてないのに無理やり分けられて迷惑かけられて？もうほんと何なのって感じだし、まじで」

A 「まあね。なんかほんと、そう思うと、大人ってあれだね。めんどくさいね」

D 「もうほんとにね、周りの迷惑考えない奴、多すぎる。自分の都合ばっかでさ。家も職場も。いい加減面倒見切れないって」

A 「とりあえずまあ、あれじゃない？結婚するときは、色々慎重に考えようねってことで」

D 「間違いないね。夢とか語りだすやつは駄目絶対。もう絶対覚えとくわ、今度」

A 「え、何それ、何かあるの？」

D 「いや別に、ちよっと来週ね」

A 「え、まじで、お見合い」

D 「違うから。お見合いって古いな、お前。グループ同士だし」

A 「え、不良じゃん、そんなの。何くるかわかんないよ」

D 「いやそんなんじゃないって。一応、前の職場の先輩が紹介してくれたから。とりあえずグループでご飯いください」

A 「えーまじでー」

D 「別にいいだろ。何か悪いことある？」

A 「いやないけどさあ。ほんとでも、多分色々問題あるって、どんな人来るかわからないでしょ？」

D 「だからだいたい仕事先の人だって。会社員」

A 「それだけ？」

D 「あと一応、写真もあるけど」

A 「うわまじで、ちよっと見せて」

D 「やだ。てか関係ないじゃん」

A 「ケチ。別に減らないのに」

D 「ていうか別に、見た目で選ぶとかじゃないから。さっきも言ってたでしょ」

A 「え、やっぱり好きになったらその人がタイプ派ですか」

D 「なんだそりゃ。ていうかだから、好きとかタイプとかじゃなくて。そこそこ安定して普通ならもうそれでいいから別に」

A 「えー」

D 「何よ、悪いか」

A 「だってさあ、なんか、愛がないなあ。結婚するのに」

D 「まだしないから、どんだけ急ぐの」

A 「え、でも、最後にはそうなるかもしれないわけでしょ。急いだほうがいいらしいよ」

D 「うっさいな、わかってるよ。だから慎重に選びたいの」

A 「え、でも、それじゃ好きとか愛とかいらないわけ？一生過ごす相手に」

D 「別にいらなくはないけど、愛はお金くれないからね」

A 「うわ、ドライ」

D 「割とそういうもんなんだよ。まあそりゃ、今からある日突然運命の出会いしないとも限らないけどね」

A 「いや、それも無理だろ」

D 「わかんないじゃんそんなの。白馬の王子さまはいつくるかわからないからね」

A 「乙女か」

D 「あきらめてないもん、ある日いきなり、優しくてかつこよくて金持ちな運命の人がド
アあけて迎えにきてくれるわけよ」

A 「はあ」

上手から荷物を持ったC登場。すこし間

A 「えー」

D 「ないわー」

C 「なにこの帰ってきての歓迎具合」

D 「帰ってこなくてよかったよ」

A 「いや、え、狙ってたでしょタイミング」

C 「何が」

D 「もういい、やっぱ来週頑張ろう」

C 「あ、ちよつと、持ってきましたよ、倉庫のやつ」

D 「あーご苦労さん」

C 「なんだよもうほんとに・・・」

C、荷物をDに渡す。

C 「あれジュースは？」

A 「なに？」

C 「いや置いといたでしょ、さつき」

D 「流したよもう」

C 「え、まじっすか、なんで」

D 「いやいいでしょ、もう」

A 「そりゃそうだろ」

C 「ありえねー」

D 「もう、うっさいなあ」といいつつ上手に退場

C 「なんか、せっかく配達から戻ってきたのに扱いひどすぎない？（と、席に座る）」

A 「まーたさぼる」

C「疲れたの。てか、もうほんとに今日はここで終わりにする。お疲れ様」

下手のドアが開いてBが登場。ブザーが鳴り響く

B「(悲鳴)」

C「あ、おい」

A「え、あれ」

C「ごめんなさい、違うんです、そんな」

B「え、なんですか」

A「いや、何いつてるか聞こえないから」

B「え、なんですか？え？」

D「(上手から出てきて) え、何、おい」

B「(軽い悲鳴)」

A「とにかく切ってよアラーム」

D「すいません、落ち着いて、通報とかしないで」

B「いやいや、その」

A「いいから」

C「え、これどうやるの」

A「知らないけど、早くしてって」

C、苦労しながらアラームのスイッチを切る

B「え、あの、すいませんなんか」

D「いやいや、もう、ほんとに。すいません、申し訳ないです。どうかも、本当に」

B「いえ、ええ、別にそれは」

A「さっき切れていったよね？」

C「ていうかなんでさっき切ってなかったの」

D「今もうそれいいから、謝って」

A「あ、はい、すいません」

C「すいませんでした」

B「いえ、そんな、大丈夫ですから。でも、あの、すいません。やっぱりその、お邪魔でしたら」

D「いえいえ、全然、そんな。どうぞ、こちらへ」

B「あ、いえ、そうじゃないんです」

A「あ、やっぱ、さっきの」

B「あ、はい、すいません」

D 「ん？」

C 「え、何が？」

A 「いや、なんでもない」

C 「なんだよ」

D 「うるさいって。すいません、今お水お持ちしますんで」

D 上手に退場

C 「すいません、ほんと。お騒がせして」

B 「ええ、いえ・・・」

A 「あ、どうぞ、すいません、座っててくださいね」

B 「いえ、その、お気遣いなく」

A 「えつと・・・さっきもその、来られてましたよね？」

B 「ああ・・・すいません、ご迷惑おかけして」

A 「ああ、いえ、やっぱり、そっか」

C 「ちよつと、何、じゃあさつき言ってたの？」

A 「うるさいな」

C 「いや、わかんないし」

B 「すいません、あの実はですね。喫茶店を探してるんです、私」

A 「え？」

C 「いや、ここそうですけど」

A 「そういうことじゃないだろ」

C 「なんだよ」

D 上手から登場

D 「こらうるさいって、ほんとすいません（と水を置く）」

B 「いえいえ、そんな・・・えつと」

D 「あ、どうぞ、続けてください」

B 「はあ・・・その。昔、私、この辺りに住んでたことがあって。今はもう、全然遠くになっちゃってるんですけど。ほんとに、3・4歳くらい？すごく小さい頃の記憶なんですけど、そのときに連れて行かれた喫茶店があったんですね。それをなんか、覚えてて」

A 「ああ」

C 「それで、探そうかって」

B 「ええ、まあ、たまたまなんですけど、この辺に久しぶりに来たので。その、こちらの

お店も、すごく曖昧なんですけど似てるような気がして。でも、なんか聞くのもご迷惑かなっていうか変な気がして」

D 「はあ、まあ・・・でも喫茶店で、ちよくちよくありますよ、このへん。昔から」

B 「ええ、はい、なので他の所も色々、まわってみてるんですけど」

C 「なるほど」

A 「ああ、じゃあ、さっきのあのあと」

B 「あ、はい。別の所、二軒ほど行ってみて、とりあえず」

D 「え、さっき来られてたんですか」

A 「だからそうだって」

D 「いや知らないし」

C 「え、じゃあ泥棒の」

D 「はあ？」

A 「すいません、何でもないです。ちょっとこの人おかしいんで、色々」

C 「いや、おかしくないだろ、別に」

A 「いいからもう空気読めよ」

D 「二人ともだよ、しつこい」

B 「なんか、やっぱりご迷惑おかけしたみたいで」

A 「いやいや、全然そんな。なんか、よくわからないですけど。こっちのほうこそご迷惑だったみたいで、すいません。以後気をつけますんで」

B 「いえ、そんな。大丈夫です、全然」

C 「なんか、でもまあ、ようは喫茶店めぐりみたいなことですよ？別に、いいんじゃないですか。普通にすれば」

B 「あ、いえ、すいません。ちょっと色々それはあつて」

C 「あ、そうなんすか」

B 「ええ、はい。ちよつと、色々」

D 「そうですか。えつと、どうしましょう、全然、店内見てもらうとかはいいんですけど」

B 「あ、はい。ありがとうございます。じゃあその、あと、紅茶をいただけますか」

D 「あ、はい。ホットで？」

B 「はい。えつと、そうなんですけど、なんか、なんていうんだろ。特製の紅茶ってあったりしますか？」

A 「ん？」

D 「特製ですか？」

B 「あ、いえ、ないならいんです、別に。すいません、変なことって」

C 「え、中にチャーシュー入ってたりとか？」

A 「頭おかしいだろ」

C 「え、なんで」

A 「なんで紅茶に入れるんだよそんなの」

C 「特製と言えばチャーシューじゃない？」

A 「意味わかんないから」

D 「こらもう。すいません、うちだと、まあ基本普通のダージリンしかないんですけど、紅茶は」

B 「そうですね、すいません」

D 「一応、蜂蜜をいれてみたとかはあるんですけど。そういうのではなく？」

B 「じゃ、ないと思います。やってみたことがあるんですけど、なんか違うなって」

A 「ああ、じゃあ、昔のその、喫茶店にはあったんですね。特殊なのが」

B 「あったっていうのかな。一応、作ってもらえたんです。その時」

D 「お店の人に？」

B 「ええまあ。一応、その、身内の店だったもので」

D 「え？」

C 「あ、そうなんすか。親戚とかの？」

B 「いえまあ、だいたいそんな感じで」

D 「おい、あんまりそんな、立ち入ったことお聞きしないで」

B 「いえ別に、大丈夫ですよ。すいません。ご迷惑おかけしたんで、お話ししないと悪いですよね。別にそんな、大したことでもないんですけど」

D 「いえそんな」

B 「えっと、全然隠すようなことじゃないんですけど。そのお店っていうのが、私の父親に当たる人がやってた店で。たまにそこに、つれてってもらってたんですね」

C 「なんだ、そうなんだ」

B 「ええ、ほとんど普段は家に帰ってこないような感じだった記憶なんですけど。たまにそうやって、お店につれてきてくれて。そのとき、必ず出してくれたのが、紅茶だったんですね」

C 「あ、特製の。美味しい？」

B 「うーん、まあ、子供でしたけど、なんか不思議な甘い味だったかなあ。他の所では、どうしても似たような味がなくて、何なのか未だにわからないんです」

C 「なるほどね、幻の味を求めてな感じですか」

B 「そんなおおげさじゃないですけど」

D 「すいません、とりあえずちょっと、うちの紅茶持ってきますね」

D 上手に退場

B 「すいません、別にやっぱり、そんなお話しするような面白いことでもなくて」

A 「いや、そんなこと」

C 「じゃあ、やっぱり今は、もうその紅茶作れる人は？」

B 「ええ、ちよつとまあ、色々あって。どこにいるかわからなくて」

C 「ですよね」

A 「ちよつと、デリカシーなさすぎだろ。すいません」

C 「いやだって、話してくれてるんだからさ」

B 「ええ、全然、大丈夫ですよ」

A 「すいません、なんか」

B 「いえいえ」

すこし間

A 「えつとですね、でも」

B 「はい」

A 「いや、ほんと失礼なかもですけど。もし、その、紅茶があつて、お店がわかつちゃつて。たら、それつて、なんか、どうしますかね？」

C 「お前、それこそプライバシーだろ」

A 「いや、そうですね、すいません。忘れて下さい」

B 「いえいえ全然、大丈夫です。そうだなあ・・・どうしようね。あんまり考えてないですね。」

C 「そうなんですか？」

B 「ええ、ただ本当に、紅茶のことわかるのが一番興味あるくらいで。なんかもう、本当に昔のことなんで。なんかそんな、感動の再会とかはないと思うんですけど。もう、ほとんど覚えてないし。別れた理由もあるし」

A 「ああ」

C 「気まずいですよねやつぱり」

B 「というか。やつぱりその、一緒に住んでたのに、別れたわけじゃないですか。そこは一応、母親の意向とかも色々あるんでしょうけど。原因というかな、なんでそんなことなつちやつたのかなあつて、純粹に聞いてみたいですかね、疑問として。何で捨てられなきゃいけなかつたのかなつて」

A 「ええ、はい。ですよね」

D 上手から登場

D 「お待たせしました、どうぞ。とりあえずうちで普通に出してゐるものです」

B、出された紅茶を口に含む。慎重に味わっている様子。周囲はその姿を見つめる

C 「違うかい？」

B 「・・・すいません」

A 「うーん、そっかあ」

C 「そりややっぱりなあ」

D 「まあその、紅茶ってそれこそ、種類はすごく沢山ありますので。まったく同じものを
っていうのはちょっと」

B 「すいません、そうですね」

A 「別の種類とかはないの？」

D 「うち、そんな専門店じゃないし」

C 「まあ、そうですね」

A 「酒屋にないの、紅茶一覧とか」

C 「いや、あるわけないだろ」

A 「使えないな」

C 「むしろあるほうがおかしいでしょ」

B 「すいません、ほんと。やっぱおかしいですね、こんなの。そんな曖昧な記憶なん
て、あてにならないのに。ずっとこだわって、馬鹿みたいに」

A 「あ、いや」

C 「気持ちはわからなくはないですけど、やっぱ、ちょっと厳しいっすよね」

B 「そうですね・・・」

D、上手に退場

A 「でも、雰囲気は近いんですね、ここに」

B 「と、思うんですけど・・・もうでも、20年以上前の話なんで、それもやっぱり、あて
にならないですよ、すいません」

C 「いえ、なんか、すいませんでした」

B 「あの、でも、本当にありがとうございました。話聞いてもらえて、うれしかったです」

A 「いやそんな」

C 「何の役にも立たなかったんで」

A 「何もしてないじゃん」

B 「えっと、すいません、どうもご馳走様でした。あの、お会計は」

A 「ああ、えっと、あれ、どこいった」

C 「奥かな、ちょっと見てくるわ」

C、上手に退場。やや間

A 「あの、でも。どうしてやっぱりそれは、こだわられるんですかね？」

B 「はい？」

A 「いや、えっと。その、言っちゃえば、子供のころの、昔の話ですよ？それも、あんまり嬉しい記憶じゃないじゃないですか、それは。なのに」

B 「ああ」

A 「すいません、なんか、失礼だったら」

B 「いえいえ」

A 「なんかその、気になって」

B 「いえ、大丈夫です、こっちこそお騒がせしたんで」

A 「あ、いやもうそれは」

B 「いえ、そうですね。変でしたよね、なんか、いったりきたりして。今もなんかご迷惑おかけしてるのに。なんか、なんだろう。そうですね、きっと、そんなことくらいしかないんだと思うんです、自分」

A 「そんなことって」

B 「あ、いえ、全然そんな、悲しいこととかじゃなくて。むしろ嬉しいっていうか。もうね、こんな歳になっちゃったら本当毎日って、なんとか過ごすだけで必死になるんですよね、もう」

A 「そう、ですか」

B 「多分まだ、若い人は若い人で毎日必死だよと思うんでしょうけど。これくらいになったらやっぱり、子供の頃のことか、思い出すんですよ、色々。昔はこうだったなあとか」

A 「あー」

B 「だから、ですかね。よく考えたら、あんまり楽しいことじゃないかもしれないんだけど、でもそういう経験があって、今ここにいて。なんかそう思えると、なんとなく明日もしんどいけどやってやろうって感じになるんで。時々過去を振り返りたくなるんですね、結局」

A 「そうなんだ」

B 「なんか、私の場合は、ですけど。大人になって、子供の頃が遠くなってしまうとね、思い出つてすごく、消えないんです、ずっと。良いことも悪いことも、皆」

A 「やっぱり、大人って。皆、そうですね」

B 「うーん、どうだろ」

DとC、上手から登場

A 「遅いな、何してたの」

C 「いや、何か作ってて」

B 「え？」

A 「なんか、あったの？」

D 「いや、わかんないけど、一応。すいません、これ、どうですか」

D、新しい紅茶を出す。

B 「えっと」

A 「え、まじで違うやつあったの？」

C 「隠しといてからとかやるじゃないすか」

D 「うるさいな、わかんないってば。静かにして。どうぞ」

B 「あ、はい・・・すいません、いただきます」

B、出された紅茶を口に含む。慎重に味わっている様子。周囲はその姿を見つめる

B 「近い・・・気がします」

A 「ほんとに？」

C 「まじで」

B 「(再度口に含んでから) はい、多分・・・」

D 「そっか、うん」

B 「なんて種類ですか、これは」

D 「いや、さっきと一緒に。同じ種類、普通の紅茶です」

C 「へ」

B 「でも、味が全然」

A 「別物？」

B 「ええ。今まで、ほかのところではなかったですけど。でも、記憶にある味に、似てるんです。これは？」

D 「一応ね、ロシアンティーの変型バージョンみたいなもんです、それ」

A 「何それ」

C 「ロシアの紅茶？」

D 「ていうか、飲み方。単純に、ジャム入れるんです、アプリコットの」

A 「え、紅茶に？」

C 「うえ、美味しいそれ？」

D 「そうです。まあ結構甘口にはなるよ。本当は、スプーンで直になめながら飲んだりするらしいけど」

A 「へえ」

C 「え、でもじゃあ、わかるんじゃないの、そんなの。ジャム入ってたりしたら全然普通と違うでしょ」

D 「ほんととは、煮出す段階で淹れて、それから濾すの。だから、小さい子だと気づかなかったんじゃないかな。厳密には違うものかもしれないけど」

C 「どうですか？」

B 「ええ・・・その、まだ全然思い出せたりとかは、ないんですけど。こんな味だったんじゃないかって、そう思います」

A 「じゃあ、やっぱりここが」

C 「なに？」

A 「え、じゃあこの店のオーナーはさ、あいつ、そういうことなわけ？」

D 「おい。うるさいって」

B 「えっと、すいません、その」

すこし間

A 「あの、ですね」

D 「ただ、でもこれって別にそんな、特別変わった飲み方ではないんで。別にうちじゃなくても、知ってる人は知ってると思います」

C 「あ、そうなんだ」

B 「ええ、はい。ロシアンティーっていうものの自体は、私も知ってましたので」

D 「ああ、ご存じでしたか」

B 「なんとなく、そんな気はしてたんですけど、でもやっぱり、味が違って」

D 「ジャムって、理屈上どんなものでも作れちゃいますからね。その、昔のやつもアプリコットじゃないかもしれない。似てる果物であれば」

B 「ええ、はい。でも、ありがとうございます。やっぱり、そうなんだって確信が持てました」

A 「え、でも、これさ」

D 「ただやっぱりこれ、うちでは普段はやってないです。たまたま知ってただけなんで、メニューにもないし」

B 「そうですか」

C 「いままで初めて見ましたしね」

D 「どうですかね。とりあえず、多分、ロシアンティー出してたっていうことでも一歩前進なのかなとは思うけど」

B 「ええ、ほんとに。ありがとうございます」

D 「うちよりやっぱり、紅茶に力入れているとこのほうが良いかなとは思いますが。もともと全然、茶葉の種類なんかもあるでしょうし」

B 「はい」

A 「いや、その、ですね」

C 「何きよどってんだよ」

A 「うるさいって」

D 「もうほんと静かにして。すいませんなんかずっと、ご迷惑おかけしっぱなしで」

B 「いえ、ありがとうございます。良かったです。本当に助かりました」

C 「幻の味でした？」

B 「・・そうですね。なんか、良かったです。子供のころ飲んだ紅茶が、やっぱりまだあるんだなってわかって」

A 「そう、ですか」

B 「ほんとうにどうも、おかげさまで」

D 「いえいえ。お役に立てたなら良かったです、少しでも」

B 「はい。あの、おいくらですか？」

D 「あ、もう、さんざん迷惑おかけしてるんで、そんな」

B 「いえ、それは駄目です、絶対に。こんなくらいしかないですけど（千円札をやや強引に渡す）」

D 「そうですか、すいません、もう」

B 「いえいえ、こちらこそ。どうも、ありがとうございました」

D 「あ、もしよければ、近くの喫茶店で紅茶詳しいところ、ご案内しますけど」

B 「いえそんな、とんでもないです」

D 「いえいえ、それくらい」

B 「いえ本当に、大丈夫です。ありがとうございます」

B、下手から退場しかける

A 「あの」

B 「はい？」

A 「また、いつでも来てくださいね」

B 「ええ、どうもありがとうございました」

B 退場。Dもそれに続いてドアの外に出る

※以下のドアの外と中の会話は同時並行で行われる

（ドアの外の会話）

D 「すいません一応。この道まっすぐ行って大きな通りでたら、右側曲がって」

B 「あ、はい」
D 「そのままえっと、10分くらいかな、歩いたら左手に、結構本格的な紅茶やっていると
ころありますんで」
B 「あ、はい、すいませんわざわざ」
D 「いえいえ、そんな。多分すぐわかると 생각합니다。看板とかはないですけど、白いおし
やれな感じの洋館みたいなお店で」
B 「はい、すいません、どうも」
D 「いえいえ、お氣をつけて。ありがとうございました」
B 「こちらこそ。本当にお世話になりました」

(中の会話)

A 「なんで嘘つくの」
C 「嘘じゃないよ、別に」
A 「だっているじゃん、マスター。何で隠すの」
C 「そんなのわかってるよ、多分向こうも」
A 「え、いや、だって」
C 「だから子供なんだよ」
A 「え、何それ」
C 「だってそんなの、証拠もなしに騒ぐわけにいかないでしょ。ていうか、そもそも騒ぐ
って感じじゃなさそうだけど」
A 「え、でもさ」
C 「とりあえず、俺ら外野が言うことじゃないんじゃないの」

D、下手から登場

A 「おかえり」
D 「ただいま。なんか、雨降りそうだね、ひよっとして」
A 「・・・あのさ。なんか、これで、良かったのかな」
D 「ん。良かったんじゃない、多分（紅茶を片付けようとする）」
A 「うん・・・でもさあ」
C 「何」
A 「やっぱり、結局、解決になってないよね」
C 「なんじゃそら」
A 「だってさ、結局わかんないままでさ、あの人。思い出の味とか、それはまあ味わえた
のかもしれないけど。結局、何も変わらないわけじゃん」
C 「まあね」

A 「だったら、マスターに、いやマスターじゃないかもしれないけど、はっきりしないままだしさ。なんか、すっきりしないでしょ、このままじゃ」

C 「まあそうだけどさ。だから、やっぱりそんなこと言えないだろ。証拠もなしに」

A 「紅茶と雰囲気とでしょ、なんだっけ、ロシアンティーか」

D 「あのさ。割とまじで、そうだったらさ。こっちにとっても大ごとだから。そんなあやふやなことで決めつけられないの、わかる？」

A 「・・・はい。え、いやでも、ほぼ確定じゃないの、間違いなく」

C 「でもだつて、よくあるんですよ、その、ロシアンティーって」

D 「まあ、それ自体は珍しくないね。紅茶飲む人なら、だいたい」

A 「そうなんだ」

C 「あの人も知ってたっぽいし」

A 「んー・・・そうなのか、くそ」

C 「証拠不十分だね、残念ながら」

A 「うーん・・・え、こういう紅茶ってそんなによくあるんだ？」

D 「あると思う？こんなの」

A 「いや、は、え？」

C 「ないんですか？」

D 「言ったじゃん、本来だと、ジャムなめながら飲むの、ロシアンティーって。日本だと入れることになってるけどね」

A 「いや、しらないけど、そうなんだ」

D 「まず普通、店舗じゃやらないでしょ。ジャムいれてさ。それもバラとかならともかくアプリコットってさ。どうよ」

C 「・・・いや、わかんないですけど」

D 「しかもさ、濾すんだよ？煮出しといて。味濁るし、普通やるわけないでしょそんなの」

A 「いや、わかんないし、そんなの」

C 「え、つまり、てことは」

D 「そんなバカなことやるような人は、まあ、なかなかないんじゃないかってこと」

やや間

A 「え、じゃあ、いいの？あれ」

D 「いいのって何が」

A 「いや、だつてさ、その・・・今の人、ほんとに家族かもしれないわけでしょ」

D 「別にいいよ」

A 「別について」

D 「あくまで可能性高いってだけだから。それでもし違ふとかなったら困るでしょ」

A 「いやけどさ」

D 「まあ、少しお手伝いできて良かったんじゃない」

A 「いいの、そんな？だって家族かもしれないんだよ？」

D 「いいんだよ。別に家族かもしれないからって、だから別にどうってことないよ」

A 「どうって、冷たすぎでしょ」

D 「まあ、そんなもんだよ」

A 「それでいいの？」

C 「いいってか、しょうがないんでしょ」

A 「いやいや、くないよ。そんなさ、駄目でしょそれ」

D 「あのさ、子供じゃないから。そんな単純にすぐあれこれできないの。本当どうなのかとか、これ報告したりしよつかとか、これからどうするかとか、色々、整理させて」

A 「そうやってごまかす。どうせ流すんでしょそうやって、大人って」

D 「流すとかじゃないよ」

A 「違うよ絶対流すよ。なんか新しいこと起きるの怖くてめんどくさいから、あの人のことなかったことにしようって。それで何事も起こらず済むからって。すごく卑怯」

D 「いいからもう、ちよつと落ち着かせて」

A 「いやでもさあ」

C 「ねえ。お前、ちよつとうるさすぎ」

A 「え、何、なんか間違ったこと言ってる？」

C 「間違つてるとかじゃないけど、でもうざい。間違つてないけど」

A 「何それ・・・」

C 「自分で言ってたじゃん。家族とかめんどくさいだけだって」

A 「いやそれはさ」

D 「たまには正しいこというじゃん。ほんと、めんどくさいんだよ家族って」

C 「間違いないな、それは」

A 「いや、けどさ・・・」

やや間

A 「でもさ、それでもう、ずっとそのままとか、後悔するんじゃない、多分」

C 「は？」

D 「なにそれ」

A 「よくわかんないけどさ、家族ってめんどくさいってのはわかるけどさ。それはもう、すごくどうしようもないことで、滅茶苦茶嫌なことで、他人なんかにはわかんないかもしないんだけどさ。でも、やっぱり、こだわり続けるんでしょ、ずっと」

C 「ごめん、何いってんのか全然わかんない」

A 「だって言ってたじゃん、さっき、あんなに、家族のこと、文句いって。でもやっぱり必要で、だから今もこうやって店手伝って。めんどくさいってのはわかるけど、自分もうんざりしてるんだけど、でも、やっぱり、それって、大事なんでしょう、どっかで」

D 「いや、まあ」

A 「もうその昔のことは、遠くなっちゃったから、別にいいのかもしれないけど。でも、今日たまたま出会ったことは、今これからなわけでしょう。それも、すごく大事なかもしれない人なわけでしょう。それを、なんか変なことにこだわって、そうやって、流してたらね、後悔するんじゃないって」

D 「別にこだわるといいうか、あんな親のことなんかどうでもいいんだけど」

A 「だったらなおさらじゃん。それならそれでいいからさ。あきらめないで、流さないでよ。なんだろう、なんていえないのかわからないけど、とりあえず。遠くなっていく思い出が消えないっていうんなら、せめて、生きてく中で、大事なものがあるって思わせてよ」

C 「いや、何そんな盛り上がってるの」

D 「いや、まあ、いいよ。ありがとね、一応」

C 「え、伝わってたんすか、さっきの」

D 「いや、よくわかんないけど、でもとりあえず必死になってくれてさ。ありがとう。ケーキでも特別にだしたげようか？」

D、上手に退場しかける。

A 「・・あのさ、もうあの人、まず二度と来ないよ」

C 「なんで」

A 「言ったじゃん、さっきも来てたって。そんな時、言ってたし自分で。たまたま今日こーらへんにきただけで、普段は全然遠い所に住んでるって」

C 「あ、そうか」

A 「しかもあれ、もうこれから、なかなか来れないし、だからどうせ、楽しい記憶じゃないから。今日はたまたまで、多分もうこれからは、この辺来ることもないだろうって」

C 「まあ、自分が昔切り離された場所だからね」

A 「連絡先聞いとけばよかったのに」

C 「今更だろ、早くいっとけよそれ」

A 「いや、まさか、この展開とか知らなかったし」

D、ため息。時計を見て

D 「ごめん、今日は店番ずっとやっててくれる」

A 「はあ？」

D 「いいじゃん、コーヒーずっと飲めるよ」

A 「もう胃が限界なんですけど」

D、エプロンを外して出かける準備をする

D 「あ、もうこれ、アラーム絶対やめてね。わかってる？」

A 「はいはい」

C 「外しときますよ、もう」

D、下手に退場しけながら

D 「あと、BGM絶対変えないでよ」

A 「いいからもう」

D、下手に退場

C 「嘘つき、自分こそ」

A 「人聞きの悪い」

C 「どうせならもうちょっとなんかないの、どれだけ。二度と会えないとか」

A 「思いつかなかったしいいじゃん」

C 「あれ嘘って気づいてないのかな、マジで」

A 「いや、嘘かどうか知らないよ。適当なだけで、そうかもしれないし」

C 「嘘ついてごまかす人生なんてろくなもんじゃやないんじゃないっけ」

A 「ああ・・・そんな、大人の言う正論とかいちいち気にしてられないって」

C 「お、不良化宣言。いいの？」

A 「うん。なんかもう、それでいい。別に、なんか言われても、なんだろうな、気にしすぎない。馬鹿馬鹿しいし」

といいながらAは参考書を開く

C 「あれ、勉強するの」

A 「うん、まあ」

C 「どうしたの今更」

A 「いやなんかさ、ちょっと考えたんだけど」

C「うん」

A「世の中、自分ではどうしようもないことってあるわけじゃん」

C「はあ？」

A「生まれた所とか、家族とか。まあなんでもいいけど」

C「ああ」

A「そういう、自分のせいじゃないのに自分じゃどうしようもできないことって、なんか
凄く悔しいなあって」

C「そうかな」

A「そうなんじゃない、やっぱ」

C「まあうちも大金持ちの家に生まれたら配達はしてないか」

A「夢見すぎでしょそれは」

C「え、そういうことだろ」

A「いやまあ、いいけどさ。とにかく、まあだから、せめて、自分でどうにかできること
はしてやろうって」

C「ふーん」

A「よくわからないけど、とりあえず。なんか、むかついたんで」

すこし間

C「それで勉強？」

A「じゃないかもしれないけど。とりあえずそれくらいは思いつかないから」

C「へー」

やや間。C、残ったジュースを一気飲みして

C「うし。じゃあ、そろそろ戻るかな」

A「ん、そっちもまあ、せいぜい頑張って」

C「えらそうだなこいつ」

A「まだ未来の可能性あふれてるんだよこっちは」

C「そうだといいですね」

C、上手に退場

A「ちょっと、瓶なおしてけよ」

C（声のみ）「可能性あふれてるんだからよろしく」

A「わけわかんないし・・・」

A、瓶をカウンターに片づけ、その後BGMを変更し、勉強に戻る。にぎやかなBGMが盛り上がる中、周囲が暗くなっていく

終わり